

英語ヒアリングの怪 2 題

宇部市 白藤 雄五

私は、幼少時に両耳にひどい中耳炎を患っており、耳の聞こえが悪い。つまり、聞こえていてもうまく聞き取ることができなくて、相手が何を言っているのか把握できないということが再々である。日本語でそうであるから英語ではなおさらである。以前経験した2例、恥ずかしながら紹介する。

今から40数年前の頃、山口大学医学部医学進学課程に在籍していた私は、ドイツ語を頑張って3年間勉強して、晴れて専門課程に進級が決まった。よく頑張ったというご褒美で、歯科医をやっていた姉からの資金援助で、大学生協が募集していた「イギリス ケンブリッジホームステイと語学研修3週間の旅」を申し込んだ。ツアーではあるが全国募集であり、知人もおらず飛行機の座席もバラバラで一人旅のようなものであった。私はそれまで海外に行ったことはなく、飛行機に乗るのも、その日に板付からの国内便が初めてであった。その時に、飛行機に乗ったらスチュワーデスさんが飲み物を配るものであるようである、ということは学習した。

さて、英国航空のロンドン ヒースロー行きに乗り込んだが、周りは知らない人ばかりで心細いことこの上ない。やがて、金髪美人のスタイルのいいスチュワーデスさんが飲み物を配り始めた。何やら声をかけながら配っている。何を言っているのか耳を凝らして聞いたが、どうも、「テアカ?」「テアカ?」と言いながら配っているようなのである。ムムッ、“テアカ”という英語は知らんぞ、「テアカ」?「てあか」?まさか“手垢”ではないだろうな?いや、でもこの飛行機は日本便だから、ほんとに「手垢」かもしれんぞ。食事の前にちゃんと手を洗っていますか?手垢は残っていませんか?うーん、まさかそんなことをこんな場で聞かぬかあ?そんなことを悶々と思いながら順番を待った。

ついに僕の番になった。スチュワーデスさんはにっこり微笑みながら、「テアカ?」と声をかけた。やはり“テアカ”だ。ぼくは手をもみほぐしながら、「イエス、サンキュー」と返事をした。スチュワーデスさんの表情がこわばり、一瞬動きが止まったが、すぐにまた、もっとゆっくり「テ、ア、カ?」と同じことを聞いてきた。やはり“テアカ”と言っているとは思えない。僕はもっと大げさに手をもみほぐしながら、また「イエス、サンキュー」と答えた。

すると、スチュワーデスさんは、今度はもっと顔がこわばって、もっと長く沈黙した。そして気を取り直したように、もう一度、1単語ずつ大きな声で問うてくれた。「tea、or、coffee?」

それから30年余りたった2010年4月、僕はニューヨーク行きのアメリカン航空機内にいた。5月にニューヨークの国連本部で5年ごとに開かれるNPT（核兵器不拡散防止条約）再検討会議、に参加するのではなく、会議の成功を願って、ニューヨーク市内を核兵器反対の声で圧倒しようという日本国民何千人かの市民代表団の一員としてである。当院からも4人の代表団を派遣することとなったが、私もその一員としてだった。

成田を出てしばらくしてキャビンアテンダント（CA）さん（時代が変わって客室乗務員さんの呼

び名も変わっていた) が飲み物を配り始めた。担当の CA さんはやや年配でふくよかな女性で、眼光の鋭い人だった。やはり声をかけながら回っている。僕は、もう“テアカ”には騙されないぞ、と固くこぶしを握り締めながら順番を待った。でも、今度の CA さんは「テアカ」とは言っていない。耳を澄ますと、「カッ」「カッ」と言っているようなのである。またまた知らない英語が出てきた。「カッ」「カッ」、一体何だろう? 「カッ」? ひょっとしたら「喝(かつ)」? まさか喝を入れているんじゃないだろうか? いや、でも核兵器反対を言い核兵器大国アメリカに乗り込んでいくのだから「気合を入れなさいよ! 」と本当に喝を入れているのかもしれないぞ。いや、まさかそんなことはあるまいし……。僕はまたまた混乱しながら順番を待った。

ついに僕の順番が来た。CA さんは、ギョロツと僕を恐ろしい顔をしてにらみながら「カッ! 」と大きなしゃがれた声で言った。僕はその恐ろし

い形相に震え上がった、思わず「ソリー、ソリー、ごめんなさい、えーと」、などと口走った。するとその返事では話にならないとばかりに、先程よりももっと恐ろしい形相をして、僕の顔を覗き込むように近づけて「カッ! 」ともう一度叫んだ。やはり同じように、おどおどしながら「ソリー、ソリー」などと答えていると、CA さんはさらに続けて別の恐ろしい言葉を言った。「ジュー! 」僕はさらに震え上がった。本当に銃を胸元に突き付けられて「ホールドアップ」とされてしまっているような心地となった。僕が震え上がって何も返事できないでいると、「喝! 」「銃! 」のおたけびが僕を襲った。何も反応できないでいると、さらに「喝! 」「銃! 」が襲い掛かってきた。

僕はなすすべもなく恐怖にかられていると、隣の席の団員が口をはさんだ。「コーヒーかジュースか、いいかげん早く返事をしてあげたらどうですか? 」

